◉ 精華町・京都文教大学・京都文教短期大学との包括連携協定を締結

まちづくり、教育・文化、子育て支援、産業・観光の振興、人材育成など幅広い分野で相互協力していきます。

2月21日(木)に、京都文教大学、京都文教短期大学と精華町は、地域振興や人材育成などで連携、協力する包括協定を締結しました。この日、精華町役場では、木村要精華町長、京都文教大学平岡学長、京都文教短期大学安本学長の3者による協定締結式が行われました。今後、この協定を契機に、町の各種事業での学生のボランティアや健康、食育、観光などをテーマにしたフィールドワーク、学生のインターンシップの受入などを実施する予定です。2019年度の子育てをテーマとしたシンポジウム開催に向けて準備を進めています。

◉ 地域連携学生プロジェクトが京都府議会議員との座談会に参加

活動を通して見えてきた地域の課題や、学生の役割について議論を交わしました。

京都府議会議員で広報広聴会議を担当する議員5名と京都府内の大学で、まちづくりや地域活性化に取組むゼミやプロジェクトに所属する学生らとの座談会が1月17日(木)に京都府庁で開かれました。選挙権の年齢引き下げを受け、若者へ政治や府議会活動への理解を深めることを目的に毎年実施されており、今回、京都文教大学にも参加要請がありました。京都文教大学からは、地域連携学生プロジェクト「響け！元気に応援プロジェクト」の佐竹秀規さん(総合社会学部4年次生)と「KASANEO」の代表　渡邉綾乃さん(総合社会学部3年次生)が出席し、活動紹介と①活動を通して感じた地域の課題、②活動を通じて、大学生がすべきことの2つのテーマに沿った意見交換会に臨みました。

お知らせ

京都文教大学教員と共に地域課題に取組む「ともいき研究」(共同研究)を募集します!

本学では、自治体職員、団体・企業、地域住民が研究員として参画する共同研究を推進し、個別課題について、より深く解決策を模索する地域志向研究を募集いたします。

特に本学の学問特性を生かし、地域福祉・保育(子ども家庭福祉・子育て)・学校教育(小中高大連携・郷土教育・観光学習)・メンタルヘルス(復職支援・自死予防)などの分野や、観光、商店街、まちづくり、中小企業研究・地場産業、都市経営などの共同研究を充実させ、地域課題解決に取り組みます。

- **申請期間：2019年3月1日(金)～2019年4月2日(火)**
- **研究期間：2019年4月1(月)～2020年3月31日(火)**
- **募集内容：(Ⅰ)30万円(上限／1年間)・(Ⅱ)50万円(上限／1年間)**
- **募集対象：地域住民・自治体・企業・各種法人団体等**
- **対象地域：京都府内または、滋賀県域内**
- **テーマ(例)：地域福祉・保育(子ども家庭福祉・子育て)・学校教育(小中高大連携・郷土教育・観光学習)・メンタルヘルス(復職支援・自死予防)・観光・商店街・まちづくり・中小企業研究・地場産業・都市経営　等**
- **応募までの流れ**

【必須】事前個別相談 → 応募フォームの提出 → 本学教員とのマッチング → 採択の審議 ※結果は5月下旬

＊応募フォームを提出する前に、京都文教大学社会連携部フィールドリサーチオフィスへ事前に必ずご連絡ください。
＊本学教員との共同研究となるため、応募フォームの内容と教員の専門分野とのマッチングを図ります。
＊応募フォームならびに「ともいき研究」募集要項については、京都文教大学地域協働研究教育センターHPからダウンロードできます。
＊問い合わせは、京都文教大学社会連携部フィールドリサーチオフィスまでお願いします。

京都文教大学 地域協働研究教育センター
ニューズレター「ともいき」vol.16 (2019年3月発行)
発行：京都文教大学地域協働研究教育センター

【お問合せ】
京都文教大学社会連携部フィールドリサーチオフィス
〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足80　TEL：0774-25-2630　FAX：0774-25-2822
E-mail：fro@po.kbu.ac.jp　京都文教大学／京都文教大学地域協働研究教育センター

京都文教大学　文部科学省 地(知)の拠点　文部科学省 地(知)の拠点

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニューズレター ともいき TOMOIKI vol.16

2019年3月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。

京都COC＋フォーラム2019
地域とともにいきる

2019年2月8日（金）に実施しました。

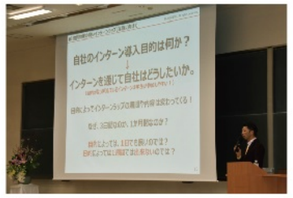
文部科学省地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）「北京都を中心とする国公私・高専連携による京都創成人材育成」（代表校：京都工芸繊維大学）では、京都府の中で人口流出が進む北京都（府北部・中部地域）を中心として、京都府全体の地域創生を担う人材育成を国公私立大学・高専の連携により2015（平成27）年度より推進しています。本事業では参加校・事業協働機関間との連携事業として、毎年1回「COC+フォーラム」を開催しており、本年は京都文教大学が当番校を務めました。今回のフォーラムでは「地域」で働くこと、学ぶこと、生活することをテーマに、教育と社会の「現場」を繋ぐ実践的教育プログラムである「インターンシップ」に着目し、これに関連した基調講演、ならびにシンポジウムを開催しました。フォーラムには、学内外から約120名の参加者があり、宇治市など京都府南部地域を中心とした公務員、会社員（経営者）の方が多く参加され、福知山市や宮津市、京丹後市など京都府北部地域からの来場者も目立ち、本事業の関心の高さと「オール京都」での展開の浸透度を反映する結果となりました。
※COC＝Center of Community

■ 当日のタイムスケジュール

13:30 ～ 13:50　開会挨拶：平岡　聡　（京都文教大学 学長）
　　来賓挨拶：川村 匡 氏　（文部科学省高等教育局私学部私学行政課課長補佐）
　　趣旨説明：森　正美　（京都文教大学地域協働研究教育センター長）
13:50 ～ 14:50　基調講演
　　「地域」にとって教育効果の高いプログラムの実践
　　～「実践型」、「起業家型リーダー育成」のインターンシップの事例に見る
　　地域が育む人材の輩出～
　　講師：伊藤　淳司 氏　（NPO法人ETIC. ローカルイノベーション事業部 事業部長）
　　瀬沼　希望 氏　（NPO法人ETIC. ローカルイノベーション事業部サブマネージャー）
14:50 ～ 15:10　ポスターセッション
15:10 ～ 16:40　シンポジウム
　　「地域」で働くこと、学ぶこと、生活すること　～地域でともに活きるために～
16:40 ～ 17:00　閉会挨拶：森迫 清貴 氏　京都工芸繊維大学 学長

会場の様子

■ 基調講演



基調講演の様子

伊藤　淳司 氏（NPO法人ETIC. ローカルイノベーション事業部 事業部長）

愛知県名古屋市出身。早稲田大学教育学部卒。1997年からETIC.に参画し、日本初の長期実践型インターンシップ「アントレプレナー・インターンシップ・プログラム（EIP）」の事業立ち上げに携わる。コーディネーターとして、これまで500社以上の実践型インターンシップを活用した人材育成、少数精鋭組織のコンサルティングに関わる。

伊藤 淳司 氏

瀬沼　希望 氏（NPO法人ETIC. ローカルイノベーション事業部サブマネージャー）

新潟県小千谷市生まれ。大学在学中より、新潟にて地域コーディネート団体の立ち上げに参画。地域の中小企業と大学生のインターンシップのコーディネート業務に従事。ETIC.参画後はチャレンジ・コミュニティ・プロジェクトにて「若者×地域×挑戦」をテーマに主に自治体・大学との連携プロジェクト、各地のコーディネーター育成業務を担当。

瀬沼 希望 氏

講演概要

伊藤氏、瀬沼氏が在籍するNPO法人ETIC.では、4週間から半年という長い期間にわたり、学生が新規事業や課題解決に能動的に携わる「実践型」のインターンシップを実施しています。実践型インターンシップは、参加学生たちに当事者意識を持ってキャリアを考える機会となり、またこの取組により、Iターン移住や、企業の活動が地域にも見えるようになるなど、地元への効果も期待できます。伊藤氏は、「学生と企業の目的意識の共有、そして両者を繋げる地域や団体の役割が大切」と述べました。

■ シンポジウム

「地域」で働くこと、学ぶこと、生活すること
～地域でともに活きるために～

池村 隆兆 氏

日本社会全体の労働者人口の減少により、中小企業の多くは人手不足に悩んでおり、人材確保に向けて、企業のみならず、行政や経済団体は様々な取組を実践しています。一方、教育機関においても、地元企業や行政と連携したインターンシップを実践するなど、大学卒業後の進路選択を意識し、教育活動の一環として実社会において「働くこと」、「地域社会で生きること」のスキルを伸ばすプログラムを実施しています。

今回のシンポジウムでは、大学と行政、地元経済団体・企業が取組んできた連携事業を振り返りながら、「地域」を「創生」する人材を輩出するために実行可能な今後の展開についてディスカッションを行いました。

中村 基彦 氏

【パネリスト】

池村 隆兆 氏　（京都府山城広域振興局 農林商工部 部長）

中村 基彦 氏　（丹後機械工業協同組合 専務理事）

渡邊 博子 氏
（株式会社スリーシー 代表取締役 社長、京都中小企業家同友会 伏見支部長）

宮川 草平 氏
（宮川バネ工業株式会社 代表取締役 社長、滋賀県中小企業家同友会 共育・求人委員会副委員長）

伊藤 淳司 氏　（NPO法人 ETIC. ローカルイノベーション事業部 事業部長）

瀬沼 希望 氏　（NPO法人 ETIC. ローカルイノベーション事業部 サブマネージャー）

渡邊 博子 氏

【コーディネーター】

森　正美
（京都文教大学総合社会学部 教授、京都文教大学地域協働研究教育センター長）

宮川 草平 氏

今回のフォーラムでは、京都府南部地域を代表して、株式会社スリーシーの渡邊社長、京都府北部から丹後機械工業協同組合の中村専務理事、行政の立場から京都府山城広域振興局の池村氏にパネリストとしてご登壇いただき、本学所在地周辺である京都府南部地域だけではなく「オール京都」での開催となりました。更に、隣接する経済圏で、本学への入学者数も多い滋賀県から宮川バネ工業の宮川社長をお招きして、滋賀県の事例を加え、報告や意見交換、ディスカッションを展開することで、参加者は、今回のフォーラムテーマに関して京都府の「今」を知り、理解するきっかけとなったと思います。また、NPO法人ETIC. が首都圏の学生を中心に全国で展開している別のインターンシップの形を学ぶ機会でもありました。また、「京都」という地域が、いわゆる「京都市」を中心とした「日本を代表する世界的な観光地」、「日本の伝統文化の中心」に表象されるような「京都」だけではなく、日本の一地域、社会としての「京都」を知り、広くは同じ時系列で進行する現代日本社会における少子・高齢化や人口減少、地方創生などの社会問題・課題について、意識を共有する場にもなりました。

参加者からは、「インターンシップは、学生のためという思い込みがあったが、企業のためという位置づけがあるということに気付いた」、「地域と企業の連携の仕方や、地域コーディネーターの役割が聞けて良かった」、「企業理念が地域おこしにつながり、人材育成の取り組みが地域の活性化につながるということを知った」、「受け入れ企業、学生、コーディネーターがどのように結びついてインターンシップをやっているか、具体的な例を交えて知る良い機会となった」、「学生の立場で、受け入れ側の話を聞くことができて、とても新鮮で勉強になった」などのコメントが寄せられました。

森 正美

地域連携学生プロジェクト2018成果報告会

報告会、交流会、就職ガイダンス、3本立ての企画を初めて実施しました。

2019年2月27日（水）に実施しました。

本学では、地域を対象とする学生たちの自主的な活動のなかから、地域特性を活かしつつ、成果が期待できる取組みを「地域連携学生プロジェクト」として選考、助成しています。2018年度は、宇治茶の振興と魅力発信に務める「宇治☆茶レンジャー」、宇治橋通り商店街と連携し商店街の活性化を行う「商店街活性化隊しあわせ工房CanVas」、宇治が舞台のアニメ作品「響け！ユーフォニアム」を通して、地域とアニメファンを繋ぐ「響け！元気に応援プロジェクト」、そして「ファッション」をテーマに多世代交流を行う「KASANEO」の4団体が採択され、1年間活動を進めてきました。

2019年2月27日（水）、本学にて「地域連携学生プロジェクト2018成果報告会」が開催され、採択選考会にもご出席いただいた学外審査員を含む11名の審査員と一般聴講者の前でプレゼンテーションを行いました。発表は7分、質疑応答5分、今年度の成果と課題を発表します。審査員は、プレゼンテーションのわかりやすさや構成力など5項目、取組や活動内容について目的の明確さや、課題やその解決方法など5項目をそれぞれ5段階で評価します。今回は、報告会終了後に初めての試みとして「ポスターセッション・交流会」を開催し、来場者と学生とが交流できる場を設けました。また、本学就職進路課主催で、地域連携学生プロジェクトに所属する学生を対象にした「就職ガイダンス」も行い、プロジェクト活動での自分の役割や成果を「言葉」にして「伝える」ことを学ぶ1日になりました。

■ 成果報告会 ■

1年間の活動の成果と課題を振り返ります。「CanVas」は、新たな取組として始めた、外国人観光客へのアンケート調査が評価されました。「宇治☆茶レンジャー」は、それぞれの企画リーダーが登壇し、企画毎の成果や課題を話すことで、リアルな内容が伝わりました。「響け！元気に応援プロジェクト」は、企業との連携は評価されましたが、地元に新しいファンを作るための工夫が必要との意見がありました。今年度からスタートした新プロジェクト「KASANEO」は、資料が見にくいとの指摘もありましたが、1年目でありながら精力的な活動が高く評価されました。

■ ポスターセッション・交流会 ■

報告会に続いて、プロジェクトや参加する学生への理解を深める目的として、ポスターセッションとお茶を飲みながらの交流会を企画しました。日頃の活動の一端を体験いただく仕掛けとして、「宇治☆茶レンジャー」は、メンバーが淹れたお茶を振る舞い、「KASANEO」は、これまでに提供いただいた衣服を展示、「響け！元気に応援プロジェクト」は、アニメに登場する惣菜パンを配りながら活動を伝えます。学生同士も、他のプロジェクトの活動に触れることで、取組内容を知り、交流も深まりました。

■ 就職ガイダンス ■

今回、初めての試みとなるプロジェクト参加学生を対象とした就職ガイダンスです。学生プロジェクトに所属し、この4月より新社会人となる4年次生3名が登壇し、就職先を選んだ理由や、これまで続けてきたプロジェクト活動が活かせた点、また、苦労したところ、これから就職活動を行う後輩達へのメッセージなどを話しました。普段の活動でもアドバイザー的に関わってくれる4年次生の先輩は、後輩達にとっても身近な存在です。そんな先輩たちの姿は、とても頼もしく、後輩達にも先輩の言葉はしっかり届いていました。

ソーシャルスキル演習

グループで企業を訪問し、インタビュー調査を行いました。

文章表現力、ディスカッション力、会話力といったコミュニケーション能力の涵養を図り、大学生として身につけて欲しい力や社会人基礎力を養っていきます。企業研究の方法を考え、事前調査を通して訪問先を選考、グループで企業の概要を調査し、調査項目を作成。企業訪問を実施し、インタビューで得た訪問企業の特徴を「企業紹介」として報告書にまとめました。ここでは、その抜粋を紹介します。

2018年度のソーシャルスキル演習を振り返って

総合社会学部 講師：東正志

学生と会社の接点をつくることで、会社との距離感を縮める。これがソーシャルスキル演習で目指していることです。現代は、実際に足を運ばなくても、インターネットを通じて多様な情報を収集できる環境にあります。会社情報を調べるということでも同様のことがいえるでしょう。「百聞は一見に如かず」。実際に会社に足を運び、働いておられる方々とのコミュニケーションを通じてしか得られない情報があります。そうした「活きた情報」は学生にとってとても刺激的で、「もっと知りたい」という姿勢につながります。今回の取材を通じて、学生は自分達の疑問を直接会社の方々に尋ね、熱のこもった説明を聞くことで、意識が確実に変わりました。会社訪問を実施してからは、より主体的に記事づくりに取り組むようになりました。「活きた情報」にふれることによって、「会社で働くこと」に対してポジティブなイメージをもつことができたのではと感じています。今後、何らかの形で社会に出ていいく学生たちにとって、貴重な経験となりました。

履修学生学生の 声

【HILLTOP株式会社様を訪問】

当初、中小企業の製造業という業種のイメージは良いものではありませんでした。夏にHILLTOP様のインターンシップに参加させていただいたのですが、その時の企業説明で「製造業と聞くと3K（キツイ・危険・汚い）とイメージを持つ方が多いと思います、元々そのイメージ通りの会社だったが白衣を着て仕事ができる夢工場を目指して今がある」と仰っていました。社内の外観や内装、会社の理念、社員様の人柄に触れる機会を得て、製造業に対する既存のイメージが変わり、HILLTOP様のような会社で働きたいと思いました。（吉岡）

今回HILLTOP様に伺い、企業理念の奥深さから分かる企業像を学べました。中小企業の製造業と聞きキツイと私は思います。しかしそのイメージは変わりました。特にジョブ・ローテーションを実施される理由に大きく共感しました。１つの仕事だけではなく色々な方面からの仕事が出来る人材になれる環境が整えられており、私にとってこのことは大変魅力に感じました。今回お話をお聞きして、自分の中での「働きたい企業像」が以前より具体的になりました。（中村）

【株式会社　伏見上野旭昇堂様を訪問】

最初は団扇や扇子を販売している企業が一体どのようなものなのか想像がつきませんでした。実際に伏見上野旭昇堂様を見学して、日本の伝統的な物である団扇・扇子を多くの人々に届けて魅力を伝えることに皆精一杯力を注いでいることが話から分かりました。多くの客層に喜んでもらうにはどうすればよいかを考え、その年代に適した団扇・扇子を作られているのだと。

エアコンや扇風機などの存在が団扇・扇子を作る、もしくは販売する人たちにとっては向かい風になるかもしれませんが、それでも日本の伝統を守り続けていくために様々な工夫を施していることを知った私は、その姿勢や努力に対して素晴らしいと感じました。

【株式会社　アースワーク様を訪問】

私たちは、アースワーク様の社風や仕事内容を伝えたいと思い、今回インタビューを行いました。宮城社長にお話を聞き、仕事量が多く悪循環になっていたころより、今の厳選された企画をキチンとこなす体制に変わったターニングポイント、社員さん方との関わり方や変化について詳しく知ることができました。さらに「チーム力の強い会社」ということや、職場環境の特徴を知ることができました。私たちが活動しているプロジェクトやアルバイトでの環境づくりに大変参考になり、今後について考えることができました。お聞きしたお話を参考に、講義や社会人になって必要となるアイデア、友人や職場での人間関係改善に活かしていければ良いと思います。

【株式会社クロスエフェクト様を訪問】

私達は、会社見学やインタビュー調査など今回が初めてでとても緊張していましたが、クロスエフェクトの社員のみなさま方は、そんな私達を快く出迎え挨拶をしてくれました。そうしてくださったことで幾分緊張が和らぎ、「やっぱり挨拶は大事！」と改めて感じました。クロスエフェクト様の社員のみなさまがイキイキと働く姿を拝見して、「魅力的な会社とは」について、深く考えるきっかけになりました。

今回、クロスエフェクト様への取材を通じて、訪問する前の自分よりも訪問後の自分の方が、直接会社の雰囲気を知れたことによって成長することが出来たと感じています。ありがとうございました。

HILLTOP株式会社

代表取締役副社長　山本 昌作様
営業部広報　　南　麻美様
採用担当　　岡谷 祐美様

作成者：中村開成（総合社会学部３年次生）
吉岡朱佑（総合社会学部３年次生）

製造業といえば技術を持つ職人が黙々と働くイメージを持つ人が多いのではないかと思います。しかし今回インタビューさせていただいた企業はそのようなイメージではありませんでした。私たちは宇治市大久保町にあるHILLTOP株式会社様にインタビューさせていただきました。HILLTOP様は新たな考えを受け入れ人材育成からロボット・医療・バイオ・宇宙といった様々な事業に力を注がれています。新規事業開拓をするのに、手がけたことのない業種の展示会に出展し、自社に興味を持ってもらった会社との取引を開始するなどされています。

同社はアルミ加工を強みとしている会社です。アルミ素材を１点１点違うオーダーメイド、なおかつ24時間無人で機械が加工する生産システムのことをHILLTOPシステムと呼んでいます。従来、製造分野では、現場で基礎・下積みをし、その経験をもとに加工に使う刃物の選定などの加工条件を学びます。HILLTOPシステムは、こうしたいわば「職人技」をデータ化・プログラム化したものです。このシステムを利用すれば、入社から３か月ほどあれば１人で作業が行える環境になっています。同社はこのHILLTOPシステムとアルミ加工を強みとしています。

同社ではジョブ・ローテーションを積極的に取り入れておられます。「人は新しいことを学ぶときモチベーションが一番高い」と

いう考えのもと、会社の利益よりも自社の社員の仕事への充実感や人としての成長を重視されています。また、ジョブ・ローテンションによって、社内にはマルチな人材が多くなります。その結果、部署間のコミュニケーションの活発化や連携が取りやすくなるそうです。私たちは多品種単品のアルミ加工技術、HILLTOPシステム、新たな事業分野や新たな取引先の開拓、積極的なジョブ・ローテーションといった要素からHILLTOP様はどんどん新しいことに挑戦していく会社だと思いました。

株式会社　アースワーク

代表取締役　宮城 智之様

作成者：仲畑諒亮（総合社会学部３年次生）
渡邉綾乃（総合社会学部３年次生）

株式会社アースワーク様は印刷事業をメインにイベント企画事業などもされている会社です。営業エリアは宇治だけに留まらず、滋賀や大阪も含まれています。取引顧客数は80社ほど、社員数は9名です。

10年ほど前には25名の社員がおられました。当時、仕事量が多くパンク状態で、ミスが日常的に発生していたそうです。労働時間も長くなり、社内の雰囲気は良くなかったそうです。「働きやすさ、雰囲気の良さ」を実現するために、利益貢献度を基準に仕事を厳選する体制へと変えられました。その結果、社員数は減りましたが、生産性はアップしました。以前になかった朝礼も実施し、部下との親睦をより強いものにすることができ、ミスはほとんどなくなったそうです。社員の誕生日をみんなで祝いあったり、忘年会の開催、その年に優秀だったチームへの褒賞など、社内の雰囲気はとてもよく、チームワークが抜群であると感じられました。

主な出版物として、宇治と京都南部を紹介する「うじぶら」や、子育てをするママさん向けの情報誌「ワイヤーママ」があります。なかでも「ワイヤーママ」で参加者を募集されているイベント「はいはいレース」は大人気で、すぐに応募がいっぱいになるそうです。イベント企画、参加者募集、イベントの実施まで、全て自社で行っておられます。今はショッピングモール中心のイベント開催

ですが、今後はお寺や神社でも開催し、地域を活性化させたいという構想をお持ちです。宮城社長は「5年に一度、何か変化がなければ企業は存続することができない」と仰っておられました。現状に満足するのではなく、未来を見据えた仕事を日々されているのだなと感じました。

今回の取材を通して、アースワーク様の職場はメリハリのついたとても良い人間関係であり、明日を創造するために何が必要かを常に考え、日々変化をし続けておられるのだと思いました。

株式会社　伏見上野旭昇堂

代表取締役社長　上野 泰正様
取締役　　上野 裕子様

作成者：増谷寛孝（総合社会学部３年次生）
木村直起（総合社会学部３年次生）

株式会社伏見上野旭昇堂様は1968年に創業し、1973年３月１日に設立されました。事業内容は団扇や扇子の販売、カレンダーの販売などです。営業エリアは日本全国。またフランスでも販売もされています。フランスでは扇子は人気があるそうです。

同社の経営理念のひとつに「会社で働くすべての人の「物と心」の両面の幸福を追求します」とあります。この経営理念を実現するために様々な工夫をされています。例えば、ミッションマネジメントを導入し、社員ひとりひとりの目標を設定し、社員のモチベーションと組織のパフォーマンスを上げいくことで、「物と心の両面の幸福の追求」を実現しようとしておられます。

福利厚生の一環そして社内コミュニケーション活発化のために、２年に一回旅行を実施され、春にはレクリエーションの一環として会社としてボウリング大会などイベントを開催されています。このように、社内全体の雰囲気を良好にする取組みをされています。

団扇・扇子のターゲット層はそれぞれ異なっており、子供にはアンパンマンやプリキュアなどのキャラクター団扇、お年寄りの人には扇子が好まれています。最近では若い世代の人々にも扇子が好まれています。また、オリジナル商品として、顔の前にかざすだけで殿様や猫に変身できる「透明フェイス団扇」や暗闇で団扇

の扇面が光る団扇など個性的な商品が多々あります。遊び心があり、お客様に喜んでもらえる工夫を常にされておられます。

伏見上野旭昇堂様では、団扇・扇子製造を担う工場や職人の方々と密な連携をとることで、多種多様な商品を迅速に供給されています。団扇や扇子などの伝統産業は職人の数が減ってきているそうです。だからこそ、伝統産業から生まれる貴重な品物を多くの人の手に取ってもらうため、伏見上野旭昇堂の社員の皆様は日々考え、工夫をし、職人の方々との共生を続けているのです。

株式会社　クロスエフェクト

総務グループマネージャー　竹田 麻美様

作成者：北田貴大（総合社会学部３年次生）
林　善隆（総合社会学部３年次生）

今回私たちは、株式会社クロスエフェクト様に訪問しました。クロスエフェクト様では、とにかく「速いモノづくり」をコンセプトとし、デザインから試作品の製作まで幅広く活動されています。医療分野では、手術前のシミュレーションに使用する臓器モデル製作を手掛けられています。

クロスエフェクト様への印象を一言で述べると「社員のために考えられた社内環境の整備をされている会社」です。社屋は製造業のイメージとはかけ離れた外観となっています。建物全体が明るく、とてもきれいでおしゃれな社屋だと感じました。建物内も同様で、工場内はとても落ち着いた雰囲気でした。私たちは、製造業であれば大きな音を伴う作業が行われているイメージを持っていましたが、静かな環境で作業が行われていました。

オフィススペースには、部署間を仕切る壁やパーティションが一切なく、従業員同士がお互いの顔を確認し、コミュニケーションを取りながら仕事に取組めるよう工夫されています。社長室はガラス張りになっており、社長自ら従業員の姿が確認できるようになっています。お互いの仕事ぶりが確認できる事によって、近い距離感で一緒に仕事に取組むことが出来るそうです。

カフェテリアでは専属の調理スタッフによる栄養バランスの取れた温かい食事をとることができます。また、社員旅行を実施

し、日々緻密な作業を行う社員の方々の気分転換となる行事も設けられています。二階から一階に設置されている滑り台は、非常に存在感があり、社内の楽しめるコンテンツになっています。

会社見学を通じて、クロスエフェクト様では、社内全体に良い雰囲気が作られ、社員の方々はいきいきと仕事に取組むことが出来るのだと感じました。人と人との関わりを本当に大切にし、自分達が作り出す技術に自信をもっておられる点がとても印象深かったです。